バンコクだより (No. 34)

2006. 02. 10(fri)~02. 13(mon)

・・・・・国境を越えてLAOSへ・・・・

2006. 02. 10　出発（夜行寝台列車の旅）

夕方のファランポーン駅は、人でごった返していた。月曜日が祭日とあって明日からタイは3連休になる。故郷に帰る人々であろうか大きな荷物を持って大勢の人が駅に集まってくる。僕にとってこの旅行は、3回目のトライである。夜行寝台特急に乗ることは長年の夢であった。しかし、なかなかこの特急の切符を手に入れるのは難しい。今回はようやく念願の切符を手に入れ、いよいよこの日、夜行列車に乗って東北タイ、ノンカイ（nong　khai）までの約12時間の旅が始まろうとしている。このワクワクする気持ちは小学生と同じである。

定刻の20時45分、17両編成の列車はラオスとの国境駅ノンカイに向けて静かに滑り出した。1等寝台車は1両だけで17両の最後尾につけている。2人用のコンパートメント（個室寝台）でなかなか快適だ。適度に空調がきき部屋をロックすると意外に静かである。今回の旅は、僕の計画を聞き同行を申し出た得意先の安江さんと一緒である。彼のリュックサックにはお菓子の詰まった袋がいっぱいぶら下がっている。

列車はネオンの輝くバンコクの町をゆっくり抜けながら徐々にスピードを上げ北に向かって進んでいく。

車窓から流れる景色は点々と灯る明かり以外は真っ暗である。先ほど飲んだビールが興奮とともに発酵して10時半ごろには睡魔が襲ってきた。ちょうどアユタヤの町を過ぎたころだろうか。列車の探検もしてみたいのだが、明朝にすることにした。

ちなみに僕達の乗っている1等寝台料金はノンカイまで1117バーツ、2等寝台（上段588バーツ、下段658バーツ）、2等シート席（エアコンつき398バーツ、エアコンなし318バーツ）、3等シート（エアコンつき245バーツ、エアコンなし183バーツ）と実に7段階に料金が設定されている。

横になって目を閉じていると、列車の心地よい振動と夜汽車独特の音響、それと興奮とが交錯して直ぐに浅い眠りがやってきた。途中いくつかの大きな駅に止まっているのであろう振動に変わって人の動きが感じられる。何度かの浅い眠りが過ぎて、時計を見ると朝6時を少し回ったところだ。夜が白々と明け始めてきた。安江さんも目を覚ましていたようで声をかけると直ぐに返事が返ってきた。

外の景色は東北タイの田園風景に変わっている。時刻からするとコーンケーンの町を過ぎウドンタニに向

かっているのであろう。

列車はほぼ定刻の8時9分ウドンタニに到着した。東北タイの最大の街である。ここで8割ぐらいの人が降りた。約10分の停車の後、終着駅ノンカイに向けて出発した。そして8時55分これも定刻どうり国境の町ノンカイに到着した。
長いこと憧れていた寝台特急の旅は、これでひとまず終了した。予想以上にはるかに快適で安全で清潔、そして列車の運行が定刻どうりにも感激した。タイ国鉄に敬意を表したい。

晴れ渡った青空、朝の風がさわやかだ。ノンカイ駅は駅舎が新しくなってガイドブックに乗っている写真と違っている。しばし駅で安江さんと興奮の余韻に浸っていた。駅舎を出るとツクツクの攻撃を受ける。“どこへ行くの？” “ラオスかい？”
“ビザ持ってるかい？”などなど
取りあえず、明日とまるノンカイのホテルに行くことにした。宅急便(タイにもクロネコのような宅急便がある)で送っていたゴルフバックの無事到着を確認するためだ。ツクツクの運転手と交渉して50バーツでホテルまで行き2人ともゴルフバックの無事到着を確認し、いよいよラオス入国へと進む。

‥‥2006. 02. 11 LAOSへ‥‥‥

今回の旅の準備でネットでいろんな情報を仕入れていた。ラオス入国に際して15日間のビザが＄30(1500バーツ)かかる。それを100バーツの手数料で出国、ビザ申請、入国手続き一切をやってくれる旅行代理店がある。社長のサムに電話して手続きを頼むことにした。

ノンカイ駅近くのその旅行代理店で書類をまとめ、タイ国出国ゲートに向かった。大河メコンをはさんでタイ側に出入国イミグレーション、川向こうにラオス側の出入国イミグレーションがある。タイ側の出国手続きを済ませバスに乗り込みメコン河を渡っていよいよラオスに入る。

メコン河は国境の河とは思えないほど静かで穏やかである。起伏の無い平原を流れる水はインドシナ特有の茶褐色に染まり静かな流れを伴いカンボジア、ベトナムを抜け南シナ海にそそぐ。バスは10分足らずで橋を渡ってしまった。感激に浸る余裕は無い。陸路の国境越えは何度か経験したがいつもあっけない感じがする。そしてようやくラオスの土を踏んだ。ラオスは地図で見れば分かるが中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーと5つの国と国境を接し、海と接していない東南アジア唯一の国である。今回の旅行の前にラオスについての知識を得るために何度かバンコクの本屋に行ったのだが、この国を紹介している書物の

少なさに驚いた。それほど過去、現代において世界の表舞台から忘れられてしまっているのだろうか？
僕の限られた情報で調べた内容をまとめてみる。
国家の正式名はラオス人民民主共和国。国土は日本の本州程度、3/4を北部の山岳地帯と高原地帯で占める。人口550万人（タイは6500万人）約1割が首都ビエンチャンに住んでいる。民族は70を超える少数民族が大半を占める。言語はラオス語が国語であるが、ラオ・タイ語、モン・クメール語、チベット・ビルマ語、その他少数民族独自の言語があり言語の統一もむつかしい。14世紀半ばランサン王国が繁栄し16世紀に絶頂期を迎えたらしい。世界遺産に指定されている古都ルアンパバンにその王都があった。その後内乱と幾多の変遷のあと1893年フランスの植民地に下り1954年まで約60年その管理下におかれた。その後もベトナム戦争悪化に伴いラオス国内を貫くホーチミンルートにアメリカが大量の爆弾を投下し国土は焦土と化してしまった。そして1975年ようやく独立を勝ち取り現在のラオス人民民主共和国が誕生した。こうした不幸な歴史を背景に国家として開かれたのはつい最近で、ようやく復興の道を歩み始めているという。
今回の旅の目的の一つにカンボジア、バングラデッシュ、と共に世界の貧困国といわれるラオスが一体どんな国であるのか自分の目で確かめたかった。歴史背景からみると以前見たカンボジアの貧困とは少し背景が異なる。

さて、この程度の予備知識で、ともかくもラオスに足を踏み入れた。国境から首都ビエンチャンまでの20数キロの道沿いは意外と小奇麗で人々の顔も笑顔が耐えない。
しばしツクツクに揺られていると建物が少し立て込んだ町並みが見えてきた。首都ビエンチャンの町だ。12時を少し回っていた。バンコクから電話で予約を入れておいたホテル“DAY　INN”が今日の宿泊先である。チェックインを済ませ小奇麗な部屋で温かいシャワーを浴びると持ち前の好奇心が頭をもたげてくる。少しの休憩の後早速町に出てみることにした。
ホテルからまっすぐに行くと道の両側にゲストハウスと呼ばれる安宿が並んでいる。外国人旅行客、欧米人の長期滞在者？が結構目に付く。フランス植民地時代の置き土産は町の佇まいだけでなく、食文化を含め、あらゆるところに見受けられる。

そして、町の中が意外とこざっぱりしているのに驚いた。カンボジアで見た群がる乞食などは全く見かけない。人々は落ち着いた生活の中に笑顔を絶やさない。昼食に飛び込んだオープンハウスのレストランはどこかヨーロッパの田舎のレストンに来たような雰囲気でウエイターも流暢な英語を話す。地ビールでのどを潤し、既にローカルの食文化として位置づいているフランスパンにハムや野菜がたっぷりと入ったサンドイッチに舌鼓を打った。そしてまったりとした真っ黒いコーヒーを飲み終えた頃には、ここが想像していたあのラオスなのかと頭の中で整理がつかない。実に静かで落ついた町並み、そして人々の表情は明るい。オープンカフェに憩う欧米人たち（やはりフランス人が多い）は午後のゆったりとした時間を楽しんでいる。ちょっとしたリゾートの様である。
腹ごしらえを終えて街の探索に出かけた。サイクル自転車があったので、それを借りて、まずメインストリート

（ランサン通り）に向かった。途中小さな仏塔があったが、これも丁寧な管理がされていた。

ランサン通りに出て又驚いた。片道数車線の大通りの両側は瀟洒な住宅、高級ホテルが立ち並び、正面には凱旋門がそびえている。

この大通りだけでなく、脇道の路地も清潔に管理されゴミも少ない。バンコクの喧騒と裏通りの汚れに慣れてしまった僕にとって、なんとも不思議な世界に迷い込んだ気持になっている。もともと人口が少ないこの国だから当然のことだが、人間が少ない。この凱旋門の後ろには市民の憩いの場の公園が広がっている。学校帰りの女学生や若者たち、混じって大人たちが、何やら楽しそうに思い思いの時間を過ごしている。世界の貧困国ラオスのイメージは完全に崩れてしまった。僕の知っている首都といえば東京、ソウル、バンコク、パリ、ロンドン、他ヨーロッパの国々があるが、それらのどこにも無い暖かさと、平穏、そしてゆっくりと流れる時間がこの国に存在している。確かに何も無いといえばそれまでだが、それは価値観の問題で僕の感性には合っている。

この凱旋門に続くランサン通りの中ほどにマーケットがあった。民芸品、シルク地、衣料品、食料品、雑貨、本屋、デパートとは名ばかりの専門店街、食堂、市民の生活に必要なものは何でもそろっている。

但し、自国の産業が無いだけに工業製品は輸入品ばかりである。本屋に並べられた本も粗末な紙に印刷されたものだが皆熱心に手にとって見ている。
順序は前後するが町の中央部にある寺院によってみた。19世紀初めに建てられたビエンチャン最古の寺といわれる“ワット・シーサケート”がそれだ。

本殿を取り巻く境内の回廊に並べられた6840体の仏様の表情は明らかにタイのものとは異なる。寺院の様式もキンピカに飾られたタイのワットとは全く異なるたたずまいである。

清楚で簡素、南国の特有の明るさと暖かさ、当に古寺にふさわしい風格を備えている。僧侶の敬虔な祈りの姿が印象的であった。
自転車を返していったんホテルに戻った頃には、日が傾き夕暮れが迫っていた。シャワーを浴びてさっぱりしてから夕食をとりに再び町に出た。国境のメコン川までは歩いてもわずかである。川の堤にオープンレストランがあった。メコンの夕暮れを見るための観光客が大勢いた。僕たちも河に近いテーブルに席を取りいくつかの料理を注文しメコンの夕焼けを待った。

向こう岸にタイ・ノンカイの町の灯が見える。メコンを渡る心地よい夜風に吹かれながら、“今ラオスにいるんだ”、“インドシナ半島中央部でメコン川の夕暮れを見ているんだ”、そんな感動がノスタルジーの世界に誘い僕の感性を酔わせていった。そしてこの感動を伝えたい思いで日本にいる女房に電話をいれ多少興奮気味にこのスペクタクルの様子を伝えていた。とっぷりと日の暮れたビエンチャンの町は繁華街の中といえども静かで、どこかで歌うラオスの流行歌のようなメロディーが聞こえてくる。ツクツクで町の中を走ったがバンコクの喧騒とは無縁である。

・・・2006. 02. 12　ラオスからノンカイへ・・・・・・

この時期には珍しく朝から雨模様である。ホテルで朝食をとった後、もう一度凱旋門と市場に行ってみようということになり、8時過ぎに再び自転車を借りて町に出た。その頃から小粒の雨が降り始めていたが困るような雨ではない。パンフレットによると凱旋門の中を上まで登ることが出来るらしい。早速行ってみることにした。

凱旋門の上からはビエンチャンの町が一望できる。これが目抜き通りのランサン通りだ。上から見ると閑散としている。

これが裏手の市民公園、まだ朝が早いので人はまばらだ。
遠くに目をやっても高層ビルも高速道路も無く、およそ都市機能に必要な利便性は見当たらない。

あるのは豊かな緑と、点在する家々、静かな空間が広がっているだけである。でも不思議とこの静かな空間が僕の心を捉えて離さない。確かに人々の暮らしは物質的には豊かでないかもしれない。でもここには僕たちが置き忘れてきたかもしれない、温かい心の豊かさが残っている、そんな気がしてならない。

凱旋門の急な階段を下りて、昨日行った市場にもう一度行ってみた。安江さんがお土産を買い足すためだ。書き忘れていたがラオスの通貨は“キップ”という通貨である。1円が約100キップと覚えることにした。バーツとの換算より円のほうが切りがいい。そして通貨はキップ以外にバーツ、ドルが使える。但しキップは国外では通貨としての価値は無い。

僕も少しお土産を買い足しホテルに戻ってきた。12時少し前にホテルをチェックアウトした。相変わらず小雨が降っている。ツクツクで国境のイミグレまで行くつもりだったが、ホテルの前に止まっていたもぐりのタクシーと交渉して安くイミグレまで行くことにした。蛇足だがもうひとつ気になることがあった。以前カンボジアに行ったとき車にナンバーがついていないのに驚いた。またガソリンスタンドも無く、ペットボトルにいれられたガソリンが道端の出店で無造作に売られていた。そのときはやはりまだそこまで管理が出来ないんだな～と思っていたのだが、ここビエンチャンではオートバイからトラック、乗用車にいたるまでナンバープレートがついている。ガソリンも立派なスタンドで売られており、この国の行政の姿勢が感じられる。いずれにしても僕の頭の中から貧困国ラオスのイメージが一新した。

旅行書やガイドブックも少なく世界の表舞台から忘れられたこのアジアの小国は実に立派に心豊かに確実に復興の道を歩んでいる。そんな驚きと感動の余韻に浸りながらラオスを後にした。

出国、入国の手続きをへて小雨のメコン川を渡り、僕は再びタイに戻ってきた。今日の宿泊先メコン・ロイヤル・ノンカイホテルでチェックインを済ませしばし部屋で休憩することにした。7階の部屋から今渡ってきた国境の橋が見えた。

いすに腰をかけこの橋を見ていると、なんだか“今回の旅行の大半が終わってしまった”そんな感傷がわいてきた。

1時間ほどの休憩のあとノンカイの町に出てみることにした。ノンカイの町はメコン川に沿って東西3km、南北500mの小さな町である。町の中央部に市場があったので行ってみることにした。市場の商店街は人でごった返している。商品も豊富でここにもラオスとは異なる世界を見た思いだ。メコン川に張り出した桟敷のような食堂があったので、ここで少し遅い昼食とることにした。

川に面したテーブルに席をとり地元の人たちが食べている料理を注文した。茶褐色のメコンの流れが曇り空の下をゆっくり流れている。
メコンで取れた焼き魚（プラーパオ）がテーブルに運ばれてきた。野菜の上に魚の身やいろんな具を載せてスパイスの効いた薬味につけて食べる。東北タイ定番ソムタムともち米（カオ・ニョウ）も運ばれてきた。僕は流れるメコンを見ながら少し感傷に浸っていた。食事の後、町の東部にあるお寺の見物に出かけた。ワット・ポーチャイがその名前だがここの仏様は実はビエンチャンから奪ってきたものらしい。純金製とのことだ。余談だが現在バンコクのワット・プラケオ（王宮）に安置されているエメラルド仏も、もともとはビエンチャンの寺院に安置されていた。その当時シャム（現在のタイ）の侵略に合いバンコクに持ち去られ現在に至っている。弱小国ラオスは独自の優れた文化を育みながらも列強の侵略に合いこんなところにも悲劇の跡がうかがえる。

小雨が朝から降り続いている。小雨にぬれながらノンカイの町を歩いた。東北タイ（イサーン地方）はバンコクの繁栄とは無縁の貧しい地方のイメージがあった。現に都市と地方の経済格差もタイではまだまだ大きな社会問題である。しかしこれも出発前に描いていたイメージとはかなり違っていた。先ほどの市場といい、町の様子といい貧しさは感じられない。不思議な感覚を覚えながらホテルに戻ってきた。

••••2006. 02. 13　最終日••••••

同行の安江さんは大のゴルフ好きである。タイ在住2年半の間に150回以上コースに出てゴルフに夢中だ。今日は東北タイに唯一あるゴルフ場（ビクトリー・パーク・カントリークラブ）でプレーすることにしている。朝6時ホテルをチェックアウトして一日予約していた車に乗り込みゴルフ場へと向かった。8時スタートだがゴルフ場は客の人影はない。

“いつでもどうぞ••••“そんな感じで18ホール、パー72のゲームが始まった。昨日からの雨は止んで青空が広がっている。安江さんはタイに来てからゴルフを始めたらしいが、短期集中で腕を上げている。僕は20年近くクラブを握っていなかったのだが、勧められて去年から始めている。去年は10回ほどコースに出たのだが上手になる兆しは無い。安江さんの豪快なドライバーショットに感心しながら、僕はコースを右に左によたよたしながら歩腹前進である。スコアーもあるけどタイの東北部のこんなところでゴルフに興じるのも思い出になる。相変わらず人影が無く貸しきり状態の中でのプレーは気楽そのものである。
11時半ごろ18ホールのプレーが終了した。安江さんはOUTのスコアーが少し乱れたようだが、INできっちりまとめ90台なかばで終了した。僕のスコアーは•••••••忘れました。

後は東北タイ最大の町ウドンタニの街を見て夕方の飛行機でバンコクに戻る予定を残すだけとなった。ノンカイからウドンタニへは国道2号線が走っている。タイの幹線道路は実によく整備されて快適なドライブで

ウドンタニへ向かった。2時過ぎにウドンタニの町に到着。

この町はベトナム戦争当時アメリカの前線基地として米兵でおおいに賑わっていたらしい。今では東北タイの最大の町として14万人の人々が暮らしている。町に入るとイサーン地方の貧しさなどどこにもない。垢抜けた商店やショッピング街が軒を連ね多くの人たちが豊かに暮らしている様子が感じられる。バンコク郊外の町よりも、この町のほうが賑やかである。

町の外れにロータス（タイ全国に展開している大型スーパーマーケット）があり、中に入るとバンコクにいるのと変わらない。中のMKレストランでタイスキを食べて腹ごしらえをしたあと、お土産を買い足したいと言う安江さんの希望で街中のショッピング街を散策し空港に向かった。　17時40分のフライトだが、4時前には空港に到着した。

搭乗手続きを早めに済ませて、2階のレストランで思い思いの時間をすごした。安江さんはまだお土産が買い足りないのか空港内の店でお土産を買っていた。僕は1杯のコーヒーを飲みながら、この4日間の旅を振り返ってみた。

出発前に立てた旅の目的

① タイ国鉄　夜行寝台列車に乗ること

② 大河メコンを側で見ること

③ アジアの貧困国ラオスの様子を自分の目で見ること

④ 東北タイ（イサーン地方）の貧しさの実感をつかむこと

この4つの目的は全て達成できた。そして既に何度も書いたようにビエンチャンのあの豊かな空間と時間、人々の笑顔、とてもアジアの貧困国なんて言えない。更にノンカイ、ウドンタニの町の様子は東北タイの代名詞の貧しさはどこにも感じられなかった。どこに行っても人々の暮らしがあり、それなりにしっかりと根付き、そして笑顔があった。コーヒーを飲みながら少し嬉しくなっていた。

そして、次の旅はラオスの古都ルアンパバンに行ってみようと思っている。

定刻より少し遅れて飛行機は580km離れたバンコクに向かってウドンタニの町を飛び立った。1時間足らずのフライトで僕はまた喧騒のバンコクへと戻ってきた。

（以上）

その他写真

1等寝台の様子

ノンカイ到着

タイ出国イミグレーション

ラオスの地ビール

物売りのおばさん

革命博物館（休館日だった）

ビエンチャンhotel　DAY　INNの部屋

河原のレストランに現れたするめ売りのお姉さん

ビエンチャン街中にあった小さな仏塔

ビエンチャン噴水広場の屋台

ヴエンチャンの両替屋（ラオス通貨キップに両替）

メコンを望むノンカイのレストランにて（安江さん）

国境を越えてLAOSへ
2006. 2. 10 ～ 2. 13.
Vientiane
Patousay
DAY Inn Hotel
Revolution Museum
Tholat
Lang Xang Ave
Twist House
Wat シーサケット.
Laos Imigration (VISA 25$)
Royal Mae Khong Nongkhai Hotel
Thai Imigration
Thai-Lao Freend Ship Bridge
Nongkhai Station
Mae Nam Khong.
Wat Pho Chai
Victory Park Golf & Country Club 5900.
To BANGKOK
Udon Thani
To BANGKOK.
2/10 (FRI) BANGKOK 20:45 —Exp69— 3/11 (SAT) Nong Khai 8:55
17両編成 1st Class 寝台特急.
B1,117
3/11 (SAT) Nong Khai → LAOS Vientiane
メコン河
Hotel: DAY Inn Hotel
B1,020
3/12 (SUN) Vientiane → Nong Khai
Hotel: Royal Mae Khong Nong Khai
B1,000
3/13 (Mon) Nong Khai ..... GOLF .... Udon Thani 17:40
AIR Asia
FD3905便
B1,700
Bangkok 18:40
夜行寝台特急、大河メコン、LAOS首都ビエンチャン、
Thai東北の街Nong Khai 長年あこがれていた夜行
が実現した。インドシナ半島中央部。どこにいても
人々の暮らしが息づいている。
国境をはさんで大河メコンがゆっくりと流れている。
アジアの貧国国 LAOSは シンプルと素朴だった。
何もかもゆっくりとした時間が流れている。